

第46回水の作文コンクール 審査評（優秀賞）

賞	題名 学校名・学年 氏名	審査評	
地方審査 優秀賞	「いつか」のために 鹿児島市立紫原中学校 3年 原口 純依	聞いたことや調べたことから事実を述べ、水の大切さや水との関わり方について伝えている作文である。 また、最後の一文や題名には、「今、自分ができること」に加え、学んだことを通した決意が込められており、印象に残る作文である。	会話を効果的に用いることで筆者の主張に説得力をもたせ、読者を惹きつける展開となっている。最後の「蛇口をきゅっと強く閉めた」という部分から筆者の思いが伝わり、余韻をもたせる素晴らしい作品になっている。
地方審査 優秀賞	命の原動力 薩摩川内市立祁答院中学校 1年 久保 優奈	「命の原動力」の水を絶やさないう、世界と日本の水問題に関心をもち、節水について考えた作文である。 特に、自分事として考え、個人でできる節水活動に積極的に取り組もうとしているところに筆者の強い思いが感じられる。	題名の「命の原動力」がキャッチーであり、命の原動力である水を絶やしてはいけないという主張が明確である。海外の映像を見たことで普段の生活を自省し、自分事として現状を把握する姿は多くの中学生の見本となる。
地方審査 優秀賞	日本人は水を使いきすぎた。 鹿児島市立城西中学校 3年 辺木 優希奈	「湯水のように使う」という慣用句から、「水を使うこと」への意識に対する疑問をもち、様々な視点で調べたり考えたりしている。 そして、題名や最後の一文に、読者の強いメッセージが込められており、大変印象に残る作文である。	慣用句を用いることで様々な思いを抱きながら読み進められる。「水に感謝の気持ちを込めて飲もう」という筆者の思いが題名にもつながり、読みやすい作品である。分量に物足りなさがあるため、その点が残念である。

第46回水の作文コンクール 審査評（入選）

賞	題名 学校名・学年 氏名	審査評	
地方審査 入選	当たり前、ありがとう 志学館中等部 1年 芳田 希音	書き出しにある「私は海が大好きだ。」の一文が、さまざまな経験と経験をもとに考える筆者の原動力となっている。 水資源を守るために、学んだことを生かし、決意を新たに自分でできることを継続しようとするのが伝わる作文である。	「未来の海」という語句から筆者の海への思いが伝わってくる作品である。定期的にゴミ拾いをするなど、体験談を踏まえて表現しており、今を生きる人への問題提起となっている。文章量が増えれば、さらに思いが伝わってくる。
地方審査 入選	水は大切な資源 志学館中等部 1年 徳山 翔太	これまで水の無駄遣いをしてきたことに気づき、世界と日本の水問題について調べて分かったことから事実を述べ、水の大切さについて伝えている作文である。題名や最後の段落から、節水することの重要性や、これからの行動を変えようとする筆者のメッセージが伝わってくる。	自分自身を振り返り、「無駄遣いをしていくことに気が付いた」ことから世界情勢や能登半島地震等の時事問題にも関心を寄せた興味深い作品である。文章構成を練り直し、主張と事実を関連付けて書くと、より素晴らしい作品になる。
地方審査 入選	水の大切さ 喜界町立喜界中学校 2年 小山 勝利	家族との会話をきっかけに日本と世界の水問題に関心をもち節水について考えた作文である。 事実を踏まえて具体的にどのようなことを行えばよいかまで書けると、より説得力が増すとと思われる。	母親からケニアの話を知ったことで日本の水に対する現状を考え、「水は無限にあるわけではない」という結論に至る。結論に再度、ケニアの話題をもってくることでできれば、より筆者の思いが伝わる作品となる。
地方審査 入選	謎の多い水 薩摩川内市平成中学校 3年 山田 将斗	地球の「水資源」について、科学の視点で謎の解明に迫ったり、実生活と結びつけて考えたり、さまざまな視点で捉えた作文である。 更なる進化をとげるために、具体的に自分がどのようなことを行えばよいかまで書けると、より説得力が増すとと思われる。	題名が興味深く、冒頭の問題提起は読者の関心を引き寄せるために十分な書き出しである。着眼点も面白く、もっと読みたいと思わせるため、段落分けを意識し、分量を増やす工夫をすれば、今後の表現力向上に期待できる。
地方審査 入選	水の大切さ 薩摩川内市平成中学校 3年 税所 優月	実体験をもとに、生活で使用する水の必要性や、水分補給の重要性を伝える作文である。 「大人になった未来に今のきれいな水が続くようにしたい」という筆者の思いから、具体的に日常生活でどのような行動を行えばよいかまで書けると、説得力が増すとと思われる。	学校での「水の大切さ」を実感した体験を基に筆者の素直な考えや思いを述べている。短文を活用することで文章全体にリズムが生まれ、臨場感を高めることで、多くの読者が自然と惹きつけられる作品となっている。